

COVID-19 禍に伴い学内実習に変更となった小児看護学実習の組み立てとそれに対する学生の評価

○遠藤 洋次, 室谷 実愛 (関西福祉大学看護学部), 泊 祐子 (関西福祉大学大学院看護学研究科)

I. はじめに

世界的な COVID-19 禍の影響を受けて臨地実習が現地で行えない困難な状況が生じた。特に小児看護学実習では対象の年齢的特徴から、経験を他領域で補うことができない。そのため小児をリアルに理解できるような、医療施設及び保育所・幼稚園等での臨場感をもった学内実習となるように工夫した。学内実習設計は健康障害（川崎病、急性胃腸炎）のある小児の事例及び保育所等での小児の活動が理解できる視聴教材の使用、CNS による臨床講義、看護過程に基づく小児看護技術の実演で構成した。さらに、臨地実習を経験できた学生との学びの共有を計画した。

本研究では、これらの学内実習の評価を行うことを目的とする。

II. 研究方法

昨年度の A 大学小児看護学実習の中で学内実習を経験した学生を対象に、Web アンケート調査を実施した。調査内容に合わせて 5 件法および自由記載等で回答を求めた。5 件法の回答は中央値、四分位範囲を求めた。本研究は関西福祉大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

III. 結果

学内実習対象者 78 名中 52 名から回答があり、回答率は 66.7%であった。内訳は、医療施設実習のみが 6 名、保育所・幼稚園等実習が 23 名、両方が 23 名であった。

1. 医療施設

学生の評価結果では、【小児の疾患の特徴】の理解に繋がった内容は、「事例 DVD を使用した看護過程の展開」、「事例展開に基づいた看護援助の計画立案」、「援助計画にそった看護技術の実施」、「看護援助の実演発表」、「家族看護 CNS による講義の受講」であり、全てで中央値 4、四分位範囲 1.0 以下となった。【小児病棟の療養環境】の理解に繋がった内容は、「家族看護 CNS による講義の受講」のみ、中央値が 3 で、その他の項目は中央値 4、四分位範囲 1.0 以下となった。

【小児とその家族の特徴】の理解に繋がった内容は、「事例展開に基づいた看護援助の計画立案」のみ中央値が 3 で、その他の項目は中央値 4、四分位範囲 1.0 以下となった。【小児とその家族への関わり】の理解に繋がった内容は、「看護援助の実演発表」のみ中央値が 3.5 で、その他の項目は中央値 4、四分位範囲 1.0 以下となった。

2. 保育所・幼稚園等

【小児の成長・発達】、【小児への関わり方】の理解について、「発達段階を理解する DVD の視聴」、「知的障害児と家族のビデオ視聴」で中央値 4.0 となった。【親の心情理解】、【他職種連携】の理解は「知的障害児と家族のビデオ視聴」の項目で中央値 4.0 となった。その他、DVD 等視聴後のディスカッションや遊び等の計画立案・実演など全ての項目で中央値 4 となった。

3. 臨地を経験した学生との学びの共有

学びの共有では、「現場のイメージを深めることができた」や「患児や親の実際の様子を聞くことができた」、「臨地を経験した人とでは関わり方などの理解に差がある」等の意見があった。

IV. 結論

今回の学内実習設計は、臨場感をもった小児看護の理解に概ね繋がったと考えるが、直接反応を得られない学内実習では、小児や家族への関わり方は難しかったといえる。